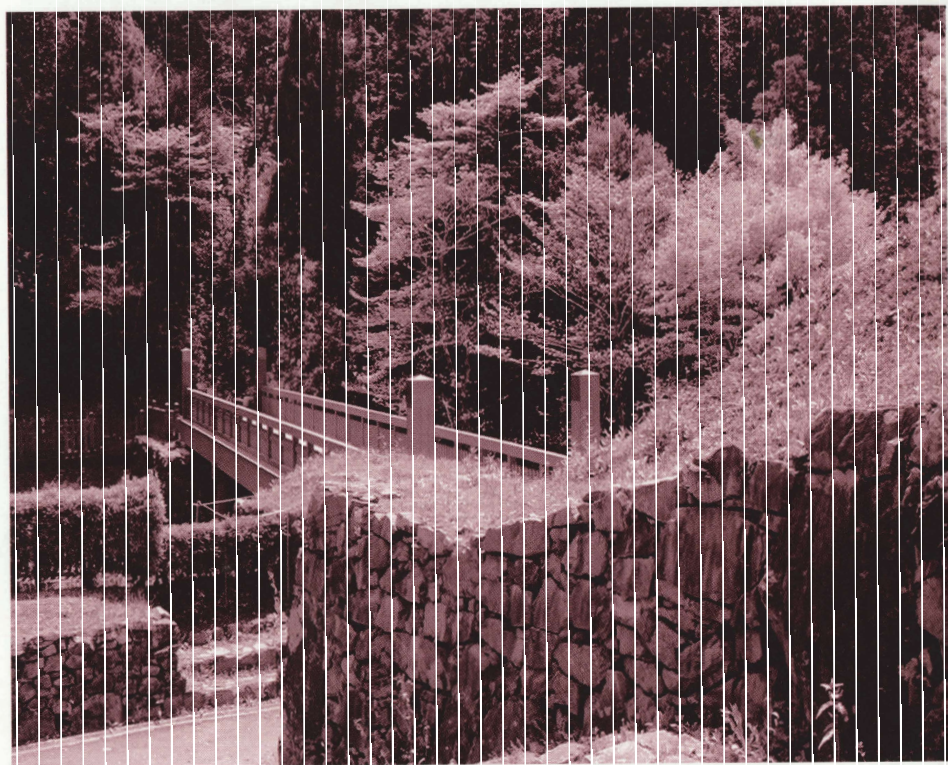


歴史研究

特集 戦国落城秘話

特集会員寄稿 落城月に咲く花 小澤真里

史談往来 能登内親王 有元松名



第672号
2019年6月号

◎巻頭随想「いま、伝えたいこと」新天皇陛下は歴史家の格別な御手本……………所 功・1

◎史談往来／北から南から

【会員随想】いわゆる「万石陪臣」の家数について……………榎本秀和・8

【会員随想】見たのは「ユーホー」？ それとも〈陽気か妖気球〉……………清水勝也・10

【会員随想】歴史の渦の中に消えた二人……………川本 齊一・12

【会員随想】出雲の理想郷と鎌倉神社……………田中真生雄・14

【会員随想】能登内親王……………有元松名・16

◎特 集 戦国落城秘話

祖父のかたき討ち……………吉岡健二・20

築城で運を開いた男……………奥田 豊・22

長久手城の戦い……………前川浩一・24

おきく物語と大阪城今昔……………唐川雅爾・26

常州谷田部城争奪戦……………毛矢一裕・28

大寧寺の変……………永野卓也・30

信濃志賀城の悲劇……………志村平治・32

能登の龍この恨み晴らさでおくべきか……………夢酔藤山・34

八王子城―落城月に咲く花……………小澤真里・36

伊丹有岡城落城時に於ける研究について……………加藤照也・38

新府城落城と武田氏滅亡……………大澤俊彦・40

上杉武士の心意気を示した魚津城の落城秘話……………竹村紘一・42

国府台城の夜泣き石……………中根一仁・44

信長軍に攻め落とされた城主たち……………藤波大三郎・46

◎特別企画／歴史研究会創立60周年記念出版事業『わが人生の誇り』

活かされて生きる自分自身への誇り……………北山 學・48

男のプライド……………阪本信子・49

一子相伝の印章相学……………源 真里・50

我が両親と妻の誇り……………小俣公司・52

◎古文書講座

役人饗応等の禁止令……………庄司恵一・57

◎歴史学講座（中級編）第七十三回

日本史の謎徹底検証（その二十）……………加来耕三・64

◎特別招待席

源義経 八百余年間、誤解され続けた兄と弟……………中津攸子・72

狗奴国の「琉球本国説」採用の必然性……………小原正哉・76

大陸文明の伝来と大和朝廷……………橋本晋吉・86

電気釜の発明と(家電)三種の神器……………

渡邊洋一・68

◎全国ネットワーク歴研〈知りたいこと 知らせたいこと〉
歴研掲示板

「追悼の辞」針 靖人さんの死を悼む…………… 加藤導男・97

特集テーマ原稿募集……………98 「特別研究」原稿募集……………99 「史談往来」原稿募集……………99

応募作品紹介……………100

会員紹介……………103 会員交流……………104

「会報・会誌紹介」『あいち歴史会誌 第159号』『城だより 第604号』『龍馬速報 第143号』ほか・106

「寄贈図書紹介」『昭和天皇の大御歌』『前島 密の構想力』『日本書紀を歩く③』ほか・109

連携団体レポート……………110

★神奈川歴史研究会 ★中国の歴史と文化を学ぶ会 ★横浜歴史研究会 ★静岡県歴史研究会

★先古代史の会 ★小山田信茂公顕彰会 ★家系研究協議会

歴研本案内……………114

誌上古書市……………116

誌上推奨展……………118

本部歴研だより……………122

事務局日誌……………124



渡邊華璋・画

*表紙写真／八王子城跡の景観(東京都八王子市)／会員提供

【本号の掲載広告】

小和田家の歴史……………表2

ようこそ歴史研究会へ……………表3

歴史研究会ご入会のおすすめ……………4

モラロジー研究所……………6

吉川弘文館……………7

大和朝廷の源流

新・神武天皇在論……………18

祝「令和」記念

本部会員懇談会……………19

美と芸術の祭典……………53

NHK学園……………56

昭和天皇の大御歌……………62

つちや書店……………63

ブックショップマイタウン……………85

平山牧人が質問に答える……………105

明智光秀……………120

在野史論十売りページ……………121

【巻末付録】

歴史研究会 入会のしおり

①五大スローガン

②あゆみと特色

③入会申込書

④会 則

【歴 研 俳 壇】

夏木立 芭蕉詣でる 雲巖寺

長野県会員 八木輝夫

五月雨や 「雨城」という名の 久留里城

千葉県会員 染谷佳子

梅雨の入り 古社寺ひそりと 叢の中

東京都会員 土田和美

叡山や 坂本燃ゆる 夏の夢

千葉県会員 斎藤周吾

逆臣の汚名 黒南風 尊氏忌

千葉県会員 荻嶋定火虎

「日本はじめて物語」 (第十九回) 電気釜の発明と(家電)三種の神器

渡邊 洋一
(本誌編集協力委員)



(東京国立近代美術館より)

「はじめチヨロチヨロ、なかパツパ、…(中略)…、赤子泣くとも蓋とるな」は、羽釜竈炊きの炊飯時の心得を示した江戸時代からの戯れ歌である。昔は飯炊きという事、ある意味技術のいる面倒な仕事で、しかもかなりの重労働であった。飯が炊けて一人前」は、昔は、飯炊きが嫁入り修行の一つであった時代もあった。しかし、今はどうだろう。勿論、羽釜竈炊きのご飯の方が味はよいとされるが、

屋外のキャンプ等のレジャーや特別な儀式等は別として、通常、家庭ではその殆どが面倒な羽釜竈炊きの炊飯を行うことはなく、電気による自動炊飯器で手軽にご飯が炊け、中には羽釜炊き同様の味を売り物にする炊飯器まで販売されている(熱源が電気ではなくガスによるガス釜もあるが構造は同様)。

「人間、如何にして楽をするか」それを考えるのが技術の革新であり、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて起こった「産業革命」にもそうした背景がある

が、日本でも戦後の高度成長期を境に生活習慣のスタイルが変貌、特にそれまでの煩雑で重労働であった家事を家庭電化製品(家電)に置き換える省力化が盛んに行われていった。そうした走りに発明されたのが電気炊飯器の発明であった。

「電気を使用して飯を炊く」という発想自体は古くから存在し、電気炊飯器の歴史も意外に古い。現在分かっているも

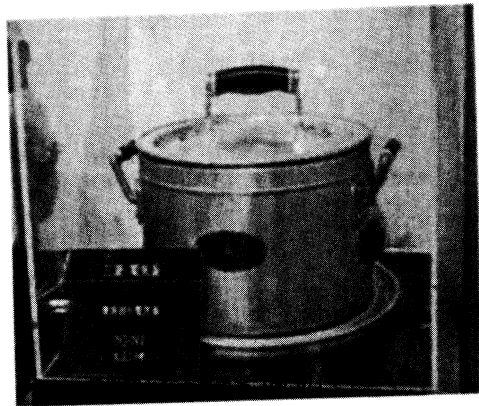
のでは、大正十二年に三菱電機が日本初の民生用炊飯器を発表した。しかし、これは単に竈の火力を薪炭から電気エネルギーへ置き換えたもので、電熱器(ヒーター)の上に羽釜を乗せ、熱効率を良くするため周り囲って保温力を高めたものであった。その後、昭和五年にその改良型で現在の炊飯器の形態の製品が発表されるが、そもそもその原理はヒーターで加熱して一定の時間と温度になるとヒーターが切れるという単純なもので「電化釜」と呼ばれたが、こうした構造は外気温の影響を受けやすく四季による寒暖の差が激しい日本の気候では必ずしも適応せず、完成品には至らなかった。

こうした電気による炊飯技術については、日清・日露戦役で炊飯時の煙が目標となって辛酸をなめた旧日本陸軍が力を入れて開発に臨み、昭和七年に正式採用となった九七式炊事自動車に炊飯櫃とい

う原始的な電気炊飯器が装備された。その仕組みは四角い木製の箱の両端に電極を付け、炊飯櫃の中に研いだ米と水を入れて電極に通電すると、中の水が通電により発熱して炊飯を行うもので、米が炊きあがると、水分が減少するため抵抗値が上昇して発熱量が少なくなり、そのまま保温に移行するという原理であった。しかし、この方式では水の量や米の研ぎ加減等で発熱量が変化して炊き加減がばらつく上に、感電の危険もあって、あくまでも戦時の非常用の域を超えるものはなかった。

戦後は各家電メーカーが挙って電気炊飯器の開発に取り組むものの中々製品化には至らず、電気を熱源にすることを諦め、練炭を熱源として炊き上がり時に電気式のプロザパーで知らせる練炭炊飯器なるものまで現れることになる。

さて、最初に実用的な電気炊飯器を発明したのは、東京大田区の町工場光伸社の三並義忠であった。三並は朝鮮戦争の



(写真はライブドアニュースより)

米軍特需がおり倒産寸前まで売上が落ち込んでいた光伸社の起死回生をこの電気炊飯器の開発に一縷の望みを求めた。その構造はそれまでの炊飯器の試作品では見られなかった炊飯器の釜を三重化し空気の層を作ることで保熱機能を高める方法を採用することで、実用的な炊飯を可能となったものであった。これに飛びついたのが「からくり儀右衛門」こと田中久重が創業した東京芝浦電気（東芝）のバイヤー山田正吾で、彼は以前から電気炊飯器開発の重要性に着目して何度も開発会議で首脳部へ提案を行っていたものの、同じ老舗家電メーカーである三菱電機や新興の松下電器や東京通信工業（現ソニー）がその開発に悉く失敗していることから開発費が認められなかった。そこに光伸社からの電気炊飯器の売込があり、東芝でも重い腰を上げることになる。といっても光伸社の製品はまだ商品化するには未完成で、そこに東芝の技術が加わった。一番大きいのがバイメタ

ル技術の採用であった。バイメタルとは膨張率の違う金属を貼り合わせてつくられた金属板をスイッチに利用したサーモスタットのことで、これにより自動的に電源のオン・オフが可能となった。そうして製品化された日本初の電気炊飯器は昭和三十年に発売された。また、別売りの付属品として自動的に電源がオンになるタイマーも発売され、これにより朝の重労働であった炊飯がタイマーさえかけおけば寝ている内に炊飯されればご飯が炊きあがっているという便利なものに変わった。とはいえ、販売価格は三千二百円と当時のサラリーマンの平均月収の三分の一の値段ですぐに普及していくという訳にはいかなかった。そうした中、バイヤーの山田はこの炊飯器を米どころの東北に持込み至る所で農家の主婦達を集めてデモンストレーションを行った。しかし、当初は何処でも反応は鈍く、「そんなに高価なものを買わうんだったら多少手間がかかって大変でも今まで通り

自分で炊いた方がいい」という意見が大勢を占めていたが、単なる白米の炊飯だけではなく火加減が難しくプロでもたまに失敗してしまう「炊き込みご飯」のデモンストレーションを行い、焦げずに失敗知らずの「炊き込みご飯」を炊き上げたりしたことで集まった主婦層の関心を買うことが出来、こうした営業努力の甲斐あって東芝製の電気炊飯器が認知されるようになっていった。そうした努力により、日本初の電気炊飯器は大ヒット商品となり、翌三十一年（1956）には松下電器が製品化に漕ぎ着けるなど、次第に全国に広まっていくことになる。とはいえ、当時の電気炊飯器には保熱機能はなく、炊き上がったご飯は旧来通り御櫃に移して保温する方式であったが、御櫃ではすぐに冷や飯なってしまうという欠点もあった。そうした中、昭和四十年に象印マホービンがそのノウハウを利用して半導体による電子制御の保熱機能を備えた米飯用の電子ジャーを開発して発

売すると、同商品は年間200万個を売る大ヒット商品となった。その後、三菱電機が昭和四十二年に保熱機能を備えた炊飯器を発売し、これらの登場によって、従来、家庭において洗米から水張り・火加減を行って、最後に御櫃に釜から移すという主婦の作業を軽減させる事にもつ



保熱機能付電子ジャー炊飯器「象印」No. 100KJ

（写真はライブドアニュースより）

ながら、同じく重労働の家事の代表であった洗濯の労力の軽減化を図った洗濯機と並んで日本の家庭の必需品とまでなっている。

ところで、電気炊飯器が出来た当時の日本は高度経済成長期にはいつてすぐの右肩上がりの状況であった。そうした世相を反映して、皇位継承の証となる「三種の神器（天叢雲剣・八咫鏡・八咫瓊勾玉）」に擬えて家庭にあるべき電化製品（家電）の「三種の神器」なる造語が出来、それをマスコミが挙げて普及していった。そうした家電は全て所持している必需品としての家電というよりは、努力して文化的生活を送るための憧れの家電で、当初その一つに冷蔵庫・洗濯機と共にこの電気炊飯器が数えられた。しかし、この電気炊飯器が瞬く間に全国に普及したことから、後に（白黒）テレビと置き換わり、巷では家電「三種

◆筆者紹介 わたなべ よういち
全国歴史研究会常任理事
宮城県歴史研究会会長
仙台郷土研究会常任理事

事務局日誌

◎平成三十一年(2019)

★4月1日(月)▼新元号「令和」が発表される。その典拠は『万葉集』という。
★4月3日(水)▼この日、聖徳太子が憲法十七条をつくる(推古13年・604)。新年号「令和」の「和」にちなみ日誌に記す。
★4月4日(木)▼松本 勝本部常任理事が来局、主幹と懇談する。
★4月11日(木)▼「投資出版」から「伝世出版」へ、自費出版へのよびかけを変更する。
★4月12日(金)▼電子版『歴史研究』の基盤づくりを検討。
★4月16日(火)▼兵庫県在住・全国本部正会員の北山 學さんの著書『太閤検地をめぐる淡路二群の天正期の指出検地』の出版を

「歴史大賞」功労賞」特薦ブックレット」として刊行することになり、鋭意、制作の準備をはじめます。
★4月20日(土)▼馬場範明全国歴史研究会本部常任理事来局、自著の小冊子『神武天皇ゆかりの地を訪ねて―東征までの九州歴史散策』を持参され、主幹と懇談する。来たる7月6日(土)に五反田文化会館で開催予定の新年号「令和」記念・会員懇談会に参加のみなさんに自弁で配布したいとのことである。
★4月27日(土)▼「前島密翁没後100年記念・墓前祭」が(日本文明の一大恩人・前島密翁を称える会)の主催で神奈川県横須賀市の浄楽寺で開催され、遺徳を偲び、本部会員有志がご焼香させていただきます。なお、翁は、日本の近代郵便制度の創始者、大正8年4月27日、85歳で同寺でその生涯を閉じる。
★4月28日(日)▼昨日からはじめての10連休となる。この連休中に、『在野史論 第16集』の編集を進めることになる。

◎全国誌『歴史研究』第673号予告(7月15日頃 全国一斉配本開始)

特集Ⅴ 女たちの明治百五十年

【おことわり】次号は合併号のため本誌の配本は7月15日頃となります。

★4月30日(火)▼本日で「平成」最後となる。天皇陛下退位。平成を紡いだ日々は1万1070日という。明日から「令和」がはじまる。

※ ※ ※

◎全国歴史研究会本部常任理事

ならびに全国誌『歴史研究』編集協力委員

高橋倭子・高橋浩子・渡邊洋一・荒濱 茂・竹村紘一・堀江洋之・坂本花子・杉原幸晴・立川誠一・小貫 孟・渡邊賢市・近藤太一・馬場範明・菊池秀夫・松本 勝・井手達剛

◎歴史研究会本部事務局スタッフ

◇主幹・編集長Ⅱ吉成 勇

*マネージャーⅡ鳥越由美子

*チーフⅡ山崎由美子

*交流センターⅡ村山三枝子

◇全国誌『歴史研究』編集部

*編集進行キヤップⅡ吉成 勇

*名誉スタッフⅡ斎藤芳子

*特任スタッフⅡ小西元子

*編集委員Ⅱ加来耕三 松本桂子

◇出版部

*編集企画委員Ⅱ内田光雄

◇刊行部

*刊行推進委員Ⅱ志村平治

歴史研究会(全国歴史研究会)

入会のしおり

歴史を学び、歴史に学ぶ

歴史研究会(全国歴史研究会)の

五大スローガン

- ① 歴史への「思い」を次代に
- ② 歴史を〈生きがい〉の一つに
- ③ 全国歴史愛好家の広場
在野史学の殿堂を
- ④ 道楽歴史学の提唱と普及を
- ⑤ 有志の顕彰「歴史大賞」を

全国誌、月刊『歴史研究』は
全国歴史愛好家・在野史学の指針です!

創立=昭和33年(1958)7月10日(木)

★ご入会方法は簡単です。下記へ、郵送か電話かFAXで遠慮なくお申込みください! 折り返しお便りいたします

〒141-0031 東京都品川区西五反田2の14の10の504

歴史研究会(全国歴史研究会)事務局

TEL 03・3779・3127 FAX 03・3779・5063

歴史研究

第672号

2019年6月号

本体価格700円+税

(送料86円)

2019年6月10日発行

編集進行

吉成 勇

発行所 合資会社 歴研

〒141-0031

東京都品川区西五反田2の14の10の504

印刷所 株式会社 シナノ

◎本会の会費について

☆会費は1ヵ月分700円です。出来るだけ、1年分にとめてお納め下さい。なお、分納でもかまいません。

☆会費は全国誌『歴史研究』の購読料となります。

☆会費はかご納入には原則として領収書をお送りいたしませんので、郵便局などの「明細票」や「受領証」を大切に保存して下さい。

◆歴史研究会事務局

〒141-0031

東京都品川区西五反田2の14の10

五反田ハイム504

口座番号 00130・4・1034229

加入者名 歴史研究会会費受付係

TEL 03・3779・3127

FAX 03・3779・5063

平成13年2月13日第三種郵便物認可 通巻672号
令和元年6月10日発行（毎月1回10日発行）

歴史研究

第61巻第6号

発行所Ⅱ〒141・0031 東京都品川区西五反田2の14の504
合資会社「歴研」

編集発行人Ⅱ吉成 勇

印刷所Ⅱシナノ

本体価格700円十税
(送料86円)



歴史 研究会

ご入会のおすすめ

●歴史研究会は、歴史を人生の生きがいの一つにと、

全国歴史愛好家の楽園、在野史家・作家の殿堂をめざします。

●歴史をテーマに、みなさまのお役に立ちたく、いろいろプランを考えています。ぜひとも、ご参加いただきたく、ご入会をおすすめします。

●詳しくは、月刊『歴史研究』巻末の「入会のしおり」をご覧ください。

●会費は、月刊『歴史研究』の購読料として、

一年分八、四〇〇円（税込）となります。

●ご入会の方法は、簡単です。

事務局あてに、はがき・電話・FAX・メールなどでご連絡下さい。

折り返し、入会申込書ほか、イベントなどのご案内をお送りいたします。

歴史研究会事務局

〒1410031

東京都品川区西五反田2の14の10

五反田ハイム504

電話03・37779・3127

FAX03・37779・5063

メールzkk@rekishikan.com



9784865480832

ISBN978-4-86548-083-2

C9420 ¥700E



1929420007002